

5) 巻町の大腸癌検診について

登坂 尚志・高山 昌史
 齊藤 貞一・今井 哲也
 松浦 徳雄 (巻町国保病院内科)
 川口 英弘 (同 外科)

巻町の大腸癌検診は昭和60年より始められ、平成5年までの9年間に延17,963名が受診しており、平成5年は2,400名を越えている。便潜血反応は昭和62年以降OC-ヘモディア(栄研)法で、1日法で行なってきた。1次検診陽性者が最初は10%以上もあったが、平成3年以後は4%以下となっている。2次検診は検査医の関係で、まず注腸を行ない、異常を指摘された時に大腸ファイバーを行なっている例が多い。2次検診受診率が平均81.8%で、約20%の未受診者が居るといふ問題点がある。検診結果は、最初偽陽性者が80%も居たが、最近では約半数に異常を認めている。大腸癌は9年間で、30例発見され、発見率は0.167%となっている。発見癌例について検討を加えた。

6) 大腸癌検診における便潜血反応の有用性に関する検討

一便潜血陽性例、臨床的出血例、他臓器疾患術前検索例に対する大腸内視鏡所見の比較一

植木 淳一・本山 展隆
 関 慶一・鈴木 和夫
 中村 厚夫・橋立 英樹
 田中 勝・和栗 暢生 (新潟県立中央病院)
 畠山 重秋 (内科)

7) 新潟県内大腸癌調査報告(1987-1990)

島田 寛治・千田 匡 (新潟県立柿崎病院)
 外科

1987年から1990年までの4年間、県内の医療施設110ヶ所(外科及び大腸内視鏡を行っている内科)で扱った前年の初回症例をアンケート方式で調査し、登録症例は4年間での重複症例を除き、5,172例を得、これを検討対象とした。

手術例は年々増加し(1,047, 1,125, 1,228, 1,331例)合計4,731例となった。

内視鏡的摘除例(以下、内Pと略、ポリペクトミーで癌を確認したが、外科手術を行わなかった例)は4年間で441例であった。

手術例は結腸2,624例、直腸2,005例、多発101例、

部位不明1例で、年次別に部位別例数を見ると、結腸、直腸共に増加している。全体の部位別頻度を見ると、結腸の中で、男性では左側が多いのに、女性では右側が多いことが認められ、全国集計(大腸がん研究会)の値と比較し、有意差を認めた。

この部位別頻度は年齢別にみると、64才以下では女性でも右側結腸の頻度は高くはないが、65才以上では明かに高くなっていることが注目され、検診陽性例の精査では右側結腸への注意が必要と考えられる。

新潟県の「大腸がん粗罹患率」をみると、内Pを含め、全体で10万人対52.0と高く、44.1, 49.6, 54.7, 59.7と4年間で15.6の増加が認められた。年齢では65才以上は、それ以下の10倍の罹患率を示した。又、県内の13の保健医療圏別頻度(年齢訂正罹患率)では新潟市と柏崎圏、巻三条圏(県中央)が有意に高く(62.8-60.2-56.1)、糸魚川圏、上越圏(県西端)村上圏、新発田圏(県北端)等が有意に低かった(27.8-47.1)。佐渡圏は粗罹患率では県内で最も高かったが(67.4)、訂正罹患率では46.2と低かった。

II. 特別講演

大腸癌検診

愛知県がんセンター消化器内科部長

小林 世美 先生

第34回新潟大腸肛門病研究会

日 時 平成6年12月10日(土)

午後3時~5時20分

会 場 新潟グランドホテル

I. 一般演題

1) 大腸側方発育腫瘍(LST)の検討

浅野 道雄・工藤 進英
 中嶋 孝司・日下 尚志
 田村 智・廣田 茂
 福岡 岳美・山野 泰穂
 三岡 博・伊藤 治
 佐野 寧・二瓶 英人 (秋田赤十字病院)
 松森 昌門・小林 匡 (胃腸センター)